

# *Women in Love* : 「星の均衡」の反定立

*Women in Love*: The antithesis of “star-equilibrium”

内藤 歆修

Kanshu NAITO

## 要 旨

最初 *The Sisters* という名の下に書き始められた小説は、やがて分割され前半を *The Rainbow*、後半を *Women in Love* として出版された。前者で理想的な両性関係が追求されて来たが、後者でもそれは引き継がれている。二組の男女の愛の姿が示される。Ursula と Birkin は病める現代文明の害悪に埋没してしまうことを拒否し、生の充実を求めて真剣に努力していく。Gudrun と Gerald は社会の中で自立的自己を失い、人生の真の目的を掴み得ず崩壊過程を辿る。

本稿では二組の男女が何故一方では理想に近い結婚に到達でき、他方の両性関係は破局に到ったのかを検証する。また「星の均衡」という理想的な男女関係がややもすると現実とはかけ離れた観念的なものに陥ってしまう危険を避けるために、「星の均衡」と対極にいる Gudrun と Gerald の例を提示し、その現実性を主張している。Hermione が代表する現代の知性偏重を背景に男女関係が内包する問題点、殊に Gudrun と Gerald の愛の危うさと理想的な男女の愛が対照的に示されている。男女関係の失敗と陰を強調することで成功と光を際立たせ、明確にしようとしている。作者がこのようにして説く愛の理想の姿を探ってみたい。

*Women in Love* は先行の *The Rainbow* の続編とは言われるが、前者は通時的 (diachronic) である後者に対して共時的 (synchronic) なストーリー構成を取っている。形態面でも *The Rainbow* は Brangwen 家の人々の3代にわたるストーリーが時間的経過を辿り、事件は継起的に起こり、年代記的に語られたが、*Women in Love* は2組の恋愛事件を主流にして、少数の主要人物の交際や行動、意見が各場面で挿話的に語られているだけで、主人公について一貫した行動の記述、精神的成長の物語などという形式は見られず、プロセスを追うものではない。固定した自我を設定して、それに従ってストーリーを展開していく従来の小説形式はここにはない。*The Rainbow* から *Women in Love* に具体的に引き継がれたものは多くないにしても、前者の舞台の歴史が後者の精神風土を形成している大きな要素となっていることは否めない。両者にまたがり主要人物として活躍するのは Ursula のみであるであるが、彼女の精神のあり方は Birkin の考え方、ひいては *Women in Love* の世界に大いに影響を与えている。そして、ロレンスはこの *Women in Love* において、理想的な結婚、「愛し合いながら、自由でいる」という問題の解答を試みる。

この小説は全体がエピソードの積み重ねで、まとまった物語の要約は難しい。その中で2組の男女が主要人物として登場する。生を否定する Gerald と Gudrun のカップルと生を肯定する Birkin と Ursula のカップルである。これら4人に準主役的な Hermione が加わって物語が展開する。第1のエピソードは2人の姉妹がベルドローヴァーの自宅で結婚について話し合っている場面から始まる。姉 Ursula Brangwen は村のグラマースクールの教員であり、妹 Gudrun は最近ロンドンのボヘミアの生活から戻ったばかりの芸術家である。話に飽きた2人は村で行われる結婚式を見に出掛ける。近隣の炭鉱主 Thomas Crich の娘の結婚式で、Crich の長男 Gerald、その友人で視学官 Rupert Birkin、また彼の愛人で知的な貴族出身の Hermione Roddice 達に会う。姉は Birkin に、妹は Gerald にそれぞれ強くひかれるものを感じる。第1章は主要な全人物の顔見せの場面を呈している。

第2章以降、これら2組の男女は交渉を重ねながら、次第に緊迫した人間関係と愛情問題を浮かび上がらせて来る。ロレンスの課題である理想的な結婚に到るには、生を肯定する Ursula = Birkin の2人の愛は成就し、否定する Gudrun = Gerald の関係は破綻を来すことになる。2組のカップルの行動や生き方を対比することで、愛と個の自由に基づく両者の平和的共存というテーマを追求し、愛し合っている者が共に自由に、個々の自我を守ることができる方法を示しているのである。愛が成就するか否かは、愛の内容と愛し合う2人の生き方や人生に対する態度に掛かっている。殊に姉の Ursula は人間の活動や人生について知的な面だけで裁断することを避け、自分自身の理解力や判断力をもって真面目に対処しようと努力しており、結婚は様々な経験の果てに来るものと考えている。しかし、妹は人生を知的に分析するのみで、人間関係も力と力の対立関係としかみなしておらず、人生に対しては斜に構えてシニカルな態度を採っている。それ故、結婚についても人生における1つの経験に過ぎないと考えている。姉の真摯な態度に比べて、最近までボヘミアの生活を送っていたという妹の虚無的な態度が際立っている。

“Diver” と題する第4章で、Ursula と Gudrun が Gerald の行為を偶然目撃する場面がある。3者の性格の一端がここで示される。雨が降ったり止んだりする春のある日、散歩中の姉妹がウィリー・ウォーター辺りにさしかかると、走って水に飛び込み、泳ぎ出す Gerald に遭遇した。水面を独り占めにしているように思い通りに泳いでいる彼の姿は、誰からも何からも干渉を受けず影響を排除して、人生を送ろうという生き方を強く示している。Gudrun は彼が水中を思い通りに泳いでいるように何にも妨げられることのない自由な生き方をしていると、彼に羨望の気持を抱くのである。Ursula は抵抗物の排除だけで自由がもたらされるはずはない、そのような生き方をすれば袋小路に入り込んで行き詰まってしまうと考えている。

人生に対して Gerald と Birkin の間にもこの姉妹の間と同じような関係が窺える。第5章 “In the train” では彼らの人生に対する態度と女性の愛し方について論じられている。Birkin は人生を大変重大に考えているが、Gerald はただ社会情勢に左右される、取るに足らぬ現象と見なして

いる。Birkin は彼に「君にとって人生の目的や意義は何なのか」と問われると返答に窮する。実は彼は「生産力というまことしやかな倫理」を人生の目的にし、それを生きがいにしている。Gerald にとっては人生に中心などはなく、生は社会機構 (the social mechanism) <sup>1)</sup> によって人工的に統一が保たれているに過ぎないものである。実際には「社会機構」即ち炭鉱経営の改善と合理化をなし遂げることが彼の最大目標であり、使命とも人生の中心ともなっていた。彼は女性との愛が人生を形成することはありえないと、人生の中心となるべき愛を見失っている。一方、Birkin は「本当に純粋な単一の活動」としての愛の必要性を説く。古い理念が死んでしまった今、生に中心を与えてくれるものは 1 人の女性との取り消しのきかぬ関係以外にはない。それは単なる愛ではなく、「究極的な愛」(the finality of love) <sup>2)</sup> つまり「女性との完全な結合」である「究極的な結婚」、現実の世界の腐敗から抜け出す唯一の手掛かりとしての「究極的な愛」である。それを人生の中心に置き、追求すべきであろうと愛の必要性を主張する。

それ程重要な女性との愛の姿はどうあるべきかが問題になってこよう。Birkin はこれからこの問題に立ち向かうことになる。先ず、彼が愛人 Hermione Roddice との間に共有した愛の本質が明らかにされる。彼女は「イングランド中部で最も著名な女性」で上流階級の「教養と知性の世界」に住む、新時代の文化の担い手として紹介される。知識を武器に、これまで自らを誰からも傷付けられない存在にしようと、また自らを世の批判の届かぬ彼方に置き、難攻不落の状態にしようと努めてきた。だが、知識至上主義を信奉する余り、物事を意識の面でしか理解せず、根元的に把握できないでいる。情熱と本能を言葉で語る事はあっても、それを実践する事はできない。

知識偏重の Hermione は「知る」という知性の機能を生の中核に置き、常に自己の精神の正しさを信じている。だが、知識を吸収する時、事物の本質をその幻影と取り違えるという失敗を犯す。その失敗の根にあるのが自意識なので、「自然の充足」を無くし内部に「恐るべき空洞」を作ってしまう。それ故、「恐るべき病のような崩壊感」に常に付きまとい、肉体的感覚が枯渇し、すり切れた観念の住処になった内面を抱えている。彼女が Birkin に求めたのはこうした自己の空洞を埋めることであり、止むことのない崩壊感を止めることであった。彼がいてくれれば自分は完全であり充足し、全一であるとの感じを持つことができた。Hermione 像はここに外見と内面の違いを鮮烈なコントラストによって示している。外見的な華麗さとは裏腹に、内面的な豊かさが完全に欠如し、自然に湧き上がる人間的な温かさに欠けているので、知識で武装し観念で身を守るしかない。苦しみを救ってくれる筈の Birkin との間が破局に近付きつつあるのを知り益々執拗に追いつがろうとする。「愛」という口実の下に彼を我がものにしようと、強い征服欲に煩悶する。彼が彼女を愛してくれさえすれば彼の前に奴隷のように跪いてもよいと思う。奴隷のようにというものの、彼を自分の手の中に収めておきたいという専制的意志を捨て切れていない。Birkin が絶対に自分のものにすることのできない存在であると知る毎に、彼女の内部は徐々に分裂作用を起こし崩壊の兆しを示して行く。

主知的な Hermione がブレダルビーの自宅で内輪の集まりの際、我々が魂において皆平等であることを認めれば破局的行動はしなくなるであろうと、単なる観念的な意見を述べると、Birkin は彼女に激しく反対する。

We are all different and unequal in spirit – it is only *social* differences that are based on accidental material conditions. We are all abstractly or mathematically equal, if you like. Every man has hunger and thirst, two eyes, one nose and two legs. We're all the same in point of number. But spiritually there is pure difference and neither equality nor inequality counts. .... Your democracy is an absolute lie – your brotherhood of man is a pure falsity, if you apply it further than the mathematical abstraction.... In the spirit, I am as separate as one star is from another, as different in quality and quantity. Establish a state on *that*.<sup>3)</sup>

Hermione は彼女の観念的主知主義に対する Birkin の強い批判で彼に激しい憎しみと嫌悪を抱く。厳しい言葉を口にしてしまい、気が咎めた Birkin は暫くして、詫びるために彼女の部屋を訪れる。彼女は手紙を書いていたので、それを妨げないように分厚いツキディディスの本を取り上げて一心不乱に読み始める。一方 Hermione は彼の来室で一種異様な混乱に陥り、緊張感は苦悶の絶頂に達し、最早手紙を書き続けることができなくなってしまう。すると突如彼の存在が自分の生の進行を妨げる壁になっているのだと、強烈に意識されて来る。この壁を打ち壊さなければ自分はこの先生延びられないという強迫観念に捕らわれる。誇り高い者にとって、自らに従わぬ者は即座に敵となる。そして敵となった者への苛立ちと憎悪から来る破壊的行動に走るのである。彼に対する憎悪の潜在意識が爆発する。瑠璃色の文鎮を左手に握りしめ、「肉欲的な戦慄が腕を伝わる」<sup>4)</sup> のを覚えつつ、恍惚状態で全力を込めてこれを彼の頭に打ち下ろす<sup>5)</sup>。1回目は指が思うように動かず、失敗した。もう1度激しく打ったが、彼は大部の歴史書でそれを受け、身を守った。即座に彼女の部屋から脱け出て、丘陵地帯へ向かう。Hermione の毒牙から辛うじて逃れた Birkin は樅の若木や樺の木や桜草の密生する丘に辿り着く。小雨も気に掛けずに裸になり、植物との接触・交流を心ゆくまで味わう。Hermione の呪縛から逃れ、自然との一体化の中に知性至上主義の環境で硬直してしまった精神を開放し、肉体的存在を自覚できた。

Hermione の殴打事件は観念的な愛の構造を論ずる上では重要な意味を持つと言える。愛は理想化され、精神や意志の面で問題となる時、男女間の結び付きという本来の機能を喪失し、行為の単なる口実の材料にしかかなり得ないことになる。彼女の暴力行為の中には愛の名の下に相手の存在を抹殺して永遠に支配し所有しようとする強い自我意識の発露が示されている。グラハム・ハフ<sup>6)</sup> は Hermione の暴力行為について抑圧された肉体の復讐であると言っている。彼女の精神主義は彼女に潜在していた荒々しい肉体のデーモンによって裏切られたのである。

この事件に見られるのは知的で意識過剰に悩む人間同士の互いに隔絶した意志の衝突である。Birkin は元恋人の Hermione の精神主義を憎悪しているものの、なお自分のうちにかつて彼女と共有していたインテリクチャリズム (知性偏重主義) 的思想や行動様式、即ち Hermione 的残滓<sup>7)</sup> をしっかりと残していることに自分でも気付いている。そのことに強い反撥を抱いて激しい Hermione 攻撃をするのだが、それはそのまま自分自身への攻撃ともなっている。口では強い確信ありげな物言いをするが、内実は自己との闘いに苦しんでいる。その反動として Hermione に対する彼の言葉は常に強引にならざるをえない。彼らは数年来の「恋人同士」として読者の前に登場し、彼女との結合は彼にとって「最高の充足」(highest fulfillment) であるとされている。即ち、彼女は Birkin の知性の試金石とも言える存在であった。だが彼は今、彼女の知識は生命のない機械的知識であり、彼女が彼に与える愛は血の通った 1 人の女性の愛ではなくて「観念的な愛」であることを理解している。彼は真の實在に到達するためには我意を捨て、官能的現実を目覚め、究極の肉体的自覚を持たなければならないという確信を得るようになっていた。知識の世界から脱して官能の世界に目覚めることこそ、ロレンスが主人公 Birkin に託した命題であった。彼のこの姿は既に Hermione と築いてきた知識偏重の思想から抜け出し、新たな段階に踏み込んだことを示している。古い思想から脱皮する際の、思想的成長に伴う精神的痛みの表出とも言えよう。不毛な Birkin と Hermione の関係は、この殴打事件で幕を閉じた。彼女の構築した精神世界が人類にとって破滅<sup>8)</sup> 以外何ものでもないことを明らかにしたこの段階で、彼女の役割は終了している。

Hermione が精神世界で破綻を起こしたのと同様に、自らの生き方に破綻を来し、自滅して行くのが Gerald である。理想的な愛を追求する Birkin の考え方と背中合わせの破滅的な生き方を実践して見せている。Women in Love の中で最も印象に残り、重要な存在はこの Gerald と言っても良いであろう。彼は時代に最も深く傷付き、その傷の深さを具体的に身をもって示しているだけに、理論が先走る Birkin よりも印象深い生身の人間を感じさせる。彼は一言にして言えば、意志の男である。その姿は第 17 章 “The Industrial Magnate” に示されている。敬虔なクリスチャンである父親 Thomas Crich の甘い人道主義的経営のために破産に瀕した炭坑を冷酷な近代的経営法によって再建することに成功した。

Thomas は労働者に対して哀れみ深い慈父のようになりたいと願っていた。神の戒律を超える程、自分自身より隣人を愛していた。理想のため、無能な者、引退すべき老人までも会社に抱え込んでしまい経営不振に陥らせるが、それでもなおこの理想にしがみついた。しかし暫くすると、炭坑夫達が彼に反逆し始める。「全ての者は平等である」と考え始めた彼らは物質的充足においても平等を求めた。Thomas は炭坑夫に慈愛をもって臨んでいたが、経営者としては権威と富を守らなければならない。炭坑夫たちはこの矛盾を突き、所有欲の充足と平等を求め、暴動を起こす。Thomas の理想はこうして炭鉱経営を破綻させた。

ドイツの大学で学び、未開社会へ探検にも出掛けたことのある Gerald は知的意識を刺激するものを追い求めて精力的に活動するタイプの青年であった。最後に真の冒険の地を見出したのが、父親の経営する炭鉱であった。たちまちのうちに能力を発揮する。キリスト教の慈愛も、民主主義の平等も馬鹿げた問題として捨て去った。彼にとって重要なのは偉大なる社会的生産機械であった。彼の経営理念は全ての人間を完全に働かせて、機能的な程度に合わせて、合理的な分け前を与えることであった。人間も出費も無駄を抑え、専門技師を迎え、新しい機械を導入して、炭鉱の仕事を徹底的に合理化してしまった。炭坑夫はただの機械の一部品に成り下がる。結局、経営の合理化は彼らが望んでいたものであり、人間が作り出した最高のものであった。ロレンスの機械文明に対する憎悪はここから始まる。肉体と精神を持ち、生命ある人間をただの機械部品にしてしまうことは、ロレンスにとって生命への冒瀆以外何ものでもない。人間の精神を破壊する機械文明の社会において、Gerald は高位の司祭となり、炭坑夫は彼に従い、この恐ろしい非人間的な新しい世界の社会秩序、即ち偉大な素晴らしい機械の一部品になることによって皆平等となり、自らが高められたと思い満足した。支配者達は機能的必要性という反対のしようのない理屈をもって、機械文明社会を構築し、民衆はそれを歓迎する。知識階層はその社会が人の生命を枯渇させているのに気付くことすらせず、進んでそれを支える理念を考え出し、積極的な支持をする。この様な社会は既に改変や改革は不可能となっており、キリスト教的隣人愛や慈悲を持ち出せば、Thomas のように大きな失敗を繰り返すだけである。

ロレンスは Gerald の合理化も Thomas の博愛主義も厳しく批判している。人間性を全否定する機会文明を根こそぎ変革したいと考えているが、それが叶わぬなら、人類をこの世から抹殺してしまうしかないと言っている。第11章でロレンスの代弁者である Birkin は Ursula に向かって、人間は “apples of Sodom” 即ち “Dead Sea Fruit, gall-apples” であると言い、人類はこの世から抹殺されればよいと切り捨てる。また、このようにおぞましい人間が固執する愛は偽りに過ぎないと主張する。だが Ursula は人が愛を言葉に出して言うだけで、愛ある行為を実行に移していないからといって、「愛が偉大でないということにはならない」と Birkin の言葉に反対するが、愛を否定する彼は自分が Ursula に求めるものは愛ではないと言う。

“There is a final me which is stark and impersonal and beyond responsibility. So there is a final you. And it is there I would want to meet you – not in the emotional loving plane – but there beyond, where there is no speech and no terms of agreement.”<sup>9)</sup>

「究極」の2人が結ぶ関係を Birkin は星のような均衡を保持する関係として彼女に提示する。

“What I want is a strange conjunction with you … not meeting an mingling … but an

equilibrium, a pure balance of two single beings: - as the stars balance each other.”<sup>10)</sup>

Birkin 即ちロレンスの社会や男女関係についての批判が、Crich 父子の炭坑経営を通じての生き方に示されている。彼らの社会的行為が単に物質欲を刺激するとか、人間を単なる道具に化してしまうなどの理由だけでなく、その根底に依存という問題が横たわっているからである。Crich 父子の主導した機械文明の中での行動や行動の対象に、人間は自身の存在に対して本来負うべき責任を、あるいは自身の存在意義を預けてしまうからである。ロレンスはここで必然的に Gerald の生き方を否定しざるをえない。

炭坑夫は既に機械文明に盲目的に従っている。以前のロレンスは下層階級の人々に共感を示していたが、この姿を目の当たりにして今までの認識を改めなければならなくなった。第 3 章で Birkin と Hermione の対話にあるように、自意識に目覚めぬ自然な、動物のような単純な原始人の状態は確かに望ましいものではある。しかし、この現代文明社会においては、意識は自ずから目覚めて来る。それを止めることができなければ、知識を十分に身につけて知性を発展させ、精神を高めることこそ重要となる。肉体、生命、宇宙などの問題は鋭い知性がなければ理解できないと、述べられている。このような認識のできない下層階級は本作品ではただ単なる背景として登場するだけである。ロレンスの視線は冷たく、憎悪と絶望の目が向けられている。最早ここにおいては *The Rainbow* における Tom に向けられていた温かい眼差しは見当たらない。

ロレンスは機械文明とその中における避けがたい依存の意識を憎悪し、排除しようとしている。男と女の間でも依存を排除し、自立すべきと考えている。Birkin は男女の関係は本来社会的でないからこそ重要で、社会的または観念的でないというその一点で社会批判の基準となりうるのではないかと考える。彼の主張する「星の均衡」(star-equilibrium) という男女の関係の考えは献身とか融合という従来の観念による「愛」ではなく、相互依存を避け、互いに独立した精神状態を保持することが重要な関係であり、依存し合う関係のアンチテーゼとなっている。

人間関係において「依存」はたやすく「従属」に変わりうる。Birkin は Hermione との関係の中で、旧来の観念的な愛に潜む人間のエゴイズムを見抜いている。エゴイズムは相手に対して自我を押し付け従属を迫る。彼は「愛」という言葉を禁句にしなければならないと考えている。愛が絶対化されると、依存や従属の関係が生じる。この事態は絶対に拒否しなければならない。憎悪や悲しみなどと同様の情念の次元に戻して取り扱おうとしている。彼は旧来の愛の概念に代わって人を根本的に結び付ける新しい理念を模索し、単に「愛」と呼ばずに「究極的な愛」と呼んだのである。旧来の愛を信じる Ursula には慎重に「愛」という言葉をできるだけ避けて、「共にある自由」(freedom together) と説明している。「星が互いに釣り合っているような、2人の個人の純粋な均衡」<sup>11)</sup> などと抽象的表現を用いている。

Birkin が探求している新しい理念は第 16 章にも説かれている。

The man is pure man, the woman pure woman, they are perfectly polarized. But there is no longer any of the horrible merging, mingling self-abnegation of love. There is only the pure duality of polarization, each one free from any contamination of the other. In each, the individual is primal, sex is subordinate, but perfectly polarized. Each has a single, separate being, with its own laws. The man has his pure freedom, the woman hers. Each acknowledges the perfection of the polarized sex-circuit. Each admits the different nature in the other. <sup>12)</sup>

我々は自らの存在を男女が混合された存在ではなく、男女の違いを完全に明確に分離し、純粋な個的存在としての男女、相交わることがない純粋な存在にし、神秘的な均衡を保ちつつ自己を持続すべきである。そこでは「自己の誇らかな個人の単独性を放棄することはない。」<sup>13)</sup>とされている。この誇り高き孤立の状態が「共にある自由」「星の均衡」である。Birkin はそのような世界で Ursula と共に完全な自己を成就するべく努力したいと願う。

2人の問題はこのような「共にある自由」を、Ursula がどの時点で完全に受容できるかである。彼らの愛の関係の転換点は正にここにある。初期段階の2人の関係では Ursula は旧来の愛の概念に固執し、彼の主張を認めない。敵意をさえ抱くが、同時に「ある根源的な絆」によって彼に惹き付けられて行く。自己矛盾ではあるが、この根源的な絆は充実した人生を送るに足る考え方だと認識するようになる。Ursula は、生の外に投げ出された人生の傍観者 (an onlooker) <sup>14)</sup> たる妹 Gudrun とは違って、有機的存在であった。人生に関わる者 (a partaker) として己の人生を確実に歩んでいる。自己の生の在り方を明確に把握しようと、思索を巡らしているのである。地に足を着け、地道に生活を送る Ursula には、Birkin のこの考えはおいそれと簡単に理解も、受け入れることもできない。この先、彼女は彼の行動と考え方、また彼の対極にある Gerald などの考え方や生き方に接することによって、彼の思想をより深く理解していくのである。

社会的に成功した Gerald は Birkin と対照的な生き方をしている。Gerald の行動は一貫して知的で、功利的である。炭鉱労働者に対しても、ペットの兎や自分の乗馬に対しても合理的な考えを貫き、徹底して人間的な優しさが欠如している。彼の目的は炭鉱の経営改善であるが、それに向かう時、精巧に論理を組み立て、強烈な意志の力で他に押し付け、深く傷付く者がいることなど全く意に介さない。第9章“Coal-dust”における、彼が乗馬を調教する場面は、Brangwen 姉妹に深い衝撃を与える。また Gerald と Gudrun の関係が決定的になる契機ともなっている。

姉妹が遮断機が下りたばかりの炭坑のトロッコの踏切にさしかかった折に、雌のアラビア馬に跨がった Gerald がそこへ来合わせる。姉妹に挨拶し馬を止め、トロッコが近づくのを待ち受ける。トロッコが近づくに連れ、その轟音に極度に怯えて、突然後ずさりしたり、必死に跳ね上がったりする。馬はトロッコが目前を通り過ぎる時、恐怖の極に達する。乗り手の Gerald はその場

から逃れようと必死にもがく馬をしっかりと抑え、彼の意志と拍車の暴力でその場に押し止める。あくまでもトロッコの轟音に対する恐怖の克服を馬に強制している。「きらりと光る薄笑いの表情」を浮かべながら、完璧な意志を自然の力に逆らって行使する。雌馬の脇腹から血が滴り落ちるのも意に介せず、拍車をさらに鋭く食い込ませる Gerald は「冷たい一条の陽の光のように冷静であった」<sup>15)</sup>。この激しい闘いで敗れて屈したのは馬であった。Gerald の振る舞いは人間的感覚から絶縁した北方的な精神を示している。かつて Gerald の妹の結婚式を Ursula と見に行き、彼を一目見て、「何か北方的なもの」「氷の結晶の中に屈折した日光にも似た輝き」<sup>16)</sup>に魅せられている Gudrun はこのような彼の行為を「すっかり魅了され、目を大きく開いて」見入っている。人馬の織りなすこの光景に接して「一瞬気が遠くなり、鋭い目眩を覚え」、次には「我を忘れて叫んでいる姉の姿に憎悪の念を抱いた」。馬上の彼の「抵抗しがたいほどに飽くまで血の服従を強いる腰と腿と脛、そこから湧き出る白い柔軟な磁気のような力」<sup>17)</sup>に完全に圧倒された。この精彩に満ちた官能的描写は Gudrun の内心の欲求の描写である。彼女は鴉のような奇妙に甲高い声で彼に向かって「さぞお得意なんでしょうね」と皮肉を言うが、この言葉は彼への共鳴の表れであろう。反撥するものは感じながらも、Gerald に惹かれる気持が現れている。調和や均衡ではなく、闘争とその勝利者ないし支配者を崇めようとする姿勢がここに窺われる。

馬に対する憐れみと共感から、最後まで Gerald の行為に対して激しい憤りを感じているのは Ursula だけである。彼女の反応は終始一貫しており、Gudrun とは全く異なった反応を示す。彼女の叫びは馬に対する優しい愛情と、馬の「生きようとする努力」を無惨に蹂躪して顧みない Gerald への怒りである。Ursula が後日、馬を不当に苛めたことに対して Gerald を非難する。しかし、彼は次のように反論する。

“I consider that mare is there for my use. Not because I bought her, but because that is the natural order. It is more natural for a man to take a horse and use it as he likes, than for him to go down on his knees to it, begging it to do as it wishes, and to fulfil its own marvellous nature.”<sup>18)</sup>

Gerald は人間が馬に従うより、馬が人間に従う方が「自然の秩序」であると主張するが、彼の考え方は馬と人間とに限ることではなくて、人間と人間との関係や彼の社会観にも関係している。人間を機械の一部と扱って成功した Gerald にとって、人間の心情や苦痛などは取るに足らぬことで、重要なのは個人を機械化することであった。人間性を無視して、人間を道具もしくは機械としか見ない考えは炭坑経営者として実に利己的である。彼はそれを自分のエゴイズムとは考えない。馬が人に従うのも、炭坑夫が炭坑経営者に従うのも自然の秩序であるのである。ここには人間的なつながりや結び付きは全く存在しない。Ursula の心情に基づいた抗議など Gerald には

理解の外であった。

踏切の邂逅の前に、既に Gerald は Gudrun に「何かアイロニックなもの」を認めて、身体がぞくぞくする程に興味をそそられていた。その2人の関係は次第に進展を見せて行く。第14章“Water Party”で貯水池の岸辺でダンスをしていた Gudrun が近くに寄ってきた牛の群れを、危険を顧みず追って行く場面がある。それを見ていた Gerald が危険を察知し牛を追い払い、「何故牛を追立てて興奮させたりするのか」と問う。この問いの後 Gudrun は「彼に対する制し難い残忍な欲望」<sup>19)</sup>に促されて彼の顔に平手打ちを食らわせる。彼の内部は「あたかも黒い感情の貯水池が破裂し、彼を水浸しにしてしまったように」<sup>20)</sup>感情が激しく渦巻く。「私にこんな振る舞いをさせたのはあなたです」という Gudrun の言葉は彼のどこかに、彼女の暴力を誘発する部分があったということを示している。Gerald は全ての抑制を失ってしまったような感じに襲われて「怒ってなんかいない。君を愛しているのです」と答えている。激情と暴力の連想か、Gerald の胸に幼少の頃誤って弟を殺した記憶が甦る。2人の関係にも死の臭いが漂っている。

この後すぐに、Gerald と Gudrun がカヌーに乗った描写が読者の注意を惹く。2人は狭いカヌーの中で一定の空間を隔ててバランスを保って座っている。場所を取り替えることもできない程の窮屈なカヌーの中で、2人の会話も親しげである。櫂の滴の音、提灯の触れ合う音、Gudrun のスカートの衣擦れ、不思議に意味あるものとなったそれらの音に囲まれていた。2人はここで初めて星のような均衡を得て相対することができたと読み取れる場面である。ここで Gerald は生まれて初めて完璧な原初の眠りに落ちる。自己主張の強い、執拗で用心深い生き方から離れ、「平和で完全な忘却」<sup>21)</sup>が彼を包む眠りに身を委ねることができた。

この至福の瞬間に又もや Gerald を死の陰が襲う。突然「夜が崩壊したように、大きな叫び声と共に、遊覧船の推進機が逆回転し、水を激しく掻き回す音が聞こえる。」妹の Diana が遊覧船から水中に落ち、続いて彼女を救助しようと、若い医師が飛び込んだのである。Gerald の救助の努力も虚しく、2人は死亡してしまう。死を伴った事件に魅入られることを避けられない Gerald の抜き難い資質がここも表されている。彼は不可避的に死の要件を呼び込んでしまう。死への指向性が高い Gerald は父親の死にも異常な執着を示す。死の恐怖と格闘することで、彼の意志は死への傾斜の度を高めて行く。父親が死を迎えようとしている頃、精神的に大きな壁に突き当たっていた。今や、炭坑再建事業は成功し、Gerald 自身は殆ど必要でなくなっていた。それ故、時々奇妙な恐れが彼を襲い、精神的に空虚な思いに囚われてしまう。彼は仕事を奪われただけで、精神的崩壊の危険を感じているのではない。彼の再建意欲を駆り立てていたのは実は父親の Thomas であった。彼にとって会社再建という建設的活動は一方では破壊活動でもあった。父親が貧民救済所のようにしてしまった会社組織を再建するには、父の失策から生じた欠陥を一つひとつ破壊していかなければならなかった。否定して、経営交代をした父親に、本当は依存していたのである。父親が死の淵に近付いている時、Gerald もまた、崩壊の道を歩んでいるのであった。

Thomas の博愛主義は他者への依存した行為である。慈善や慈愛は献げる対象があってこそその行為である。炭坑夫に対する彼の慈善行為は純粹に奉仕の精神から出たものであろうとその裏に支配欲があろうと、彼の全存在が行為の対象に依存していたことに変わりはない。慈善の対象であった炭坑夫に拒否されたとき、彼は崩壊せざるをえなかった。同様に、Gerald は炭鉱経営者として自己の使命を達成して、機械的世界における勝利者となり、最高の地点に到達した瞬間に自分を託す次なる目標を見失ってしまった今、無意識に依存していた父の死に向き合った時、死に対する恐怖は強まるばかりであった。彼の魂の中心部には「巨大な暗黒の空虚」(great dark void)<sup>22)</sup> が陣取っている。生きることのうちに確固たるものを掴みえず、外的な社会で全てを支配した時、その勝利を人間的価値に結び付ける事ができなかった故の結果である。この空虚感に自己を破壊されないために、空虚の充填物として Gerald は、芸術という合理性を超越した領域で活躍している Gudrun に頼るべきものを見出そうとする。恐るべき空虚から逃れるために、死に執着したのと同じ程度で彼女にしがみつのである。即ち、彼が Gudrun と離れることは死ぬより外に道がないことを示している。

Gerald は父の葬儀の直後に、茫然自失の状態で、泥まみれの長靴のまま Gudrun の寝室に侵入する。「ちょうど幼児が母親から生命を与える暖かさと乳を受け取るように、彼女を抱擁して」すがりつく Gerald に Gudrun は肉体を許す。彼はそれによって精神的に甦ることができた。炭鉱再建が完了してからずっと抱き続けて来た、精神的空洞が短い間にしろ、満たされることになる。しかし、Gerald は最初に力強く颯爽と「行動者」として振る舞っていた段階でこそ Gudrun を惹き付けたが、内面的空虚さを表し始めるに連れて自己崩壊の道を辿り始める。Gudrun は人間の精神の領域に見るべきものの少ない Gerald に急速に興味を失う。彼への対応においてもしばしば優越的態度を取り、彼から離れ始める。恋愛という、非社会的で完全に個人的問題においては、女性であり芸術家である Gudrunの方が Gerald に対して遙かに強者である。当然容易に彼女が支配権を握ることになる。

こういった2人の結び付きを示す良い例が“Rabbit”と題する第18章にある。Gudrun は Crich 家の娘 Winifred の絵の家庭教師となる。家庭教師を引き受けることは Gerald を愛人として受け入れる事になる危険が充分にあることを承知の上である。初めから既に男女の心の微妙な触れ合いが深い陰影をもって描かれている。Gudrun は Winifred が飼っている兎をスケッチするために小屋から出そうとして、激しく暴れ回る兎に爪で引っ掻き傷を手首に負わされる。Gudrun の心のうちに急に「凶暴な残忍性」が目覚める。そこに Gerald が通りかかり、兎を受け取る。暴れ続ける兎に対して「激しい盲目の意志」が宿る。凶暴の度を増す兎に「白刃のような鋭い激怒」に駆られて、兎を押さえつける。それを見る Gudrun の目は異様な輝きを帯び、その声は鷗のように甲高くなる。兎は死の恐怖に襲われ、最後の痙攣とともに Gerald の手首と袖を引き裂いてしまう。彼が肘の下にぐっと抱え込むと兎は怖じ気づき、死んだようにおとなしくなる。彼は顔を輝

かせて、微笑む。

先の雌馬のエピソードとは異なり、兎は Gerald にただ圧倒されてばかりはいなかった。自らの暗い生命力を爆発させ、2人をそれに巻き込んでいる。荒々しい生命力を示すことで、それに触発された2人の官能的意識を露呈させている。彼らは互いに暗い地の底を見た者の共感を持ち、「悪魔的な見るも恐ろしい白い焰」を共有したことを知った。だが、ここでも Gudrun は奇妙な、暗い、殆ど懇願するような目で、それでいて最終的には彼に打ち勝つ事を知った者の目で彼を見ている。2人は兎を力で屈服させた後で、流した血を見せ合い、互いに共通する官能性を認め合う。2人の間に同盟関係が成立した。今後の互いの関係を了解して「淫猥な笑い」を交わすのである。Gudrun は彼もまた自分と同様に1つの秘儀に参加しているのだと思う。しかし、Gerald が官能の秘密を自分と同様に知ったことは Gudrun の心を碎き、反撥を感じさせた。Gerald は彼女の官能の世界での支配的優越性を感じ取り、彼女が鈍い刃物で決定的に彼の胸を切り裂いたかのように感じた。Gerald はまたもや顔に平手打ちを喰ったかのような感じがする。Gudrun の官能の世界に入れば、自分が敗者になることも、既にここで感じ取っている<sup>23)</sup>。

Gerald と Gudrun の愛の特徴は、純粋に欲情的な官能を求める傾向にある。Birkin の場合、知性と官能のいわば止揚<sup>24)</sup>されたところに彼の主張する「自由の道」(the way of freedom)<sup>25)</sup>がある。しかし、Gerald の場合、知性の対立者として官能の世界があるだけである。Gerald は Gudrun に最初に会ったときぞっとするような欲情に襲われ、何としても彼女を手に入れたと思う。「ただグドルーンの肉体が欲しかっただけであった。そのほかには何も望まなかった」。Gudrun との結婚に関しても彼は Birkin のように「男女間の永遠の結合」を信じているのではなく、世俗的習慣に従って、結婚を考えるだけである。とは言っても、彼は既成の世界を本心で信じているわけではない。このように彼は知性の男であるが同時に既成慣習に引きずられる男でもある。

官能の世界において支配・被支配に基づく関係を背景にした男女の在り方に、強い反撥を抱くのが Birkin である。Ursula を愛する過程で、彼は彼女が余りにも官能的に過ぎると考える。彼女は女性の論理を押し付け、「愛」による融合、一心同体というようなものを求めて来るように思われる。Birkin は肉体的なものから出発する人間の欲求と共に、精神に基づく愛の希求をも重要なことと考えていた。それで、Ursula の愛の観念と闘わなければならなかった。Birkin はセックス(性)の重要性を認めてはいたが、同時に性を憎んでもいた。というのは性は男と女を1つのものとし、男女各々その片割れで、全一のものではない存在に化してしまうからであった。Birkin は男も女も各々単一のものとして、独立していることを望んでいた。その結び付きでは、男も女も互いに依存することなく、相手の自由を認め、2つの力が対極にあってバランスが取れた関係になる。一方、Ursula の主張する愛は長い間伝統的に裏打ちされてきた、女性の「大いなる母」(Magna Mater)としての根源から出て来ている欲求であるので彼の考えに屈しない。

Birkin はそのような Ursula の要求に悩まされていたある夜、暗いウィーウォーターの水面に映る月影に向かって石を投げる。第 19 章 “Moony” のこのシーンはこの小説の中でとりわけ有名である。彼の投石で月影は千々に砕けて散乱し、水面には暗い波と無数の白い月の断片がざわめく。「シビリーめ、あの女神に呪いあれ！ 忌まわしいシリアの女神め！」と叫びながら、彼は石を投げつける。この言葉からも明らかなようにこのシーンが象徴する、彼が打ち砕こうとしていたものは Ursula の執拗な欲望である。即ち、女性は女性なる故に Magna Mater<sup>26)</sup> であるという、Birkin が忌み嫌い怖れている女性の本性で、女性の所有欲、独占欲、支配欲である。Birkin はこの強い欲求を払い除けるために、何度も執拗に石を水面に投げ込む。水面に映る月影は幾度打ち砕こうとしても、混乱の果てに再び元の姿を復元してしまう。Birkin が結局悟るのは、女性のエゴは打ち消せるものではないということであった。

月の意味する象徴がなんであるにせよ、さらに重要で印象的なのは、このシーンを描く表現手段の優れた芸術性である。1 人の男が白く輝く月影に向かって狂おしげに石を投げ続ける。光が燦然として跳び、月は白熱の断片となって飛散する。湖面いっぱい広がった光の波が、揺らめき、踊り、混乱しながら、元の姿に戻るまでの水と光の描写は非常に感動的である。Ursula は彼が水面の月影に石を投げているところへ現れる。当然、この行為を見た 2 人の間には烈しい論争や感情的行き違いがある。しかし、最後には 2 人の間に優しい、穏やかな夜が過ぎて行く。彼らには深い根源的ところで繋がっている絆があり、和解して別れる。

個人が個人として自己の存在の責任を引き受けたままの結び付きの関係を Birkin が主張しても、あくまで旧来の愛にこだわる Ursula と、愛を認めない彼の間には、烈しい議論が続く。Ursula は「星の均衡」について具体的に説明する彼の言葉に男性主導の意志があると非難する。彼は Ursula に自己中心的な所有欲があると言いつつ、そうした対立の後に、2 人は徐々に自分の考えに固執することを止め、相手の意見を認めるようになる。対立がなくなったわけではなく、対立と合一が繰り返される。第 23 章 “Excuse” で Birkin が Ursula に結婚指輪を与えた夜も、烈しい口論が起きている。一度は指にはめた結婚指輪を、Ursula は泥の中に放り込んでしまうほどの烈しい口論をする。その後、2 人は歩み寄り、穏やかな気持ちに変わり、仲直りして、初めて肉体的にも結ばれる。読者はシャーウッドの森の中で神秘的な愛に目覚め、豊かな平静と充足との内に 1 組の男女の精神が解放されて、Birkin の説く「究極の愛」を成就したことを知る。

He knew her darkly, with the fullness of dark knowledge. Now she would know him, and he too would be liberated. He would be night-free, like an Egyptian, steadfast in perfectly suspended equilibrium, pure mystic nodality of physical being. They would give each other this star-equilibrium which alone is freedom.<sup>27)</sup>

これで Birkin が Ursula との関係において掲げた「共にある自由」や「星の均衡」が果たして理想的な両性関係として読者の目に映るか大いに疑問である。2人が本当に「星の均衡」の関係を達成できたのかもはっきりしない。だが、Birkin と Ursula の現実の生の在り方との関わりにおいて、彼らが成就した愛を捉えてみた場合、その愛を媒介として、彼らが真の实在へと脱皮し、生の充足を得る手掛かりを持つに到った事実は否定できない。Ursula は Birkin との愛によって古い存在を超越し自由の身として甦る。新しい世界である「实在の中心」(the heart of reality) へと参入して行く自己を見出す。Birkin は彼女との結婚を「自己の復活であり、生命」であると感ずる。一方、強固な精神的結合を築かないままに、相手に依存する関係は結局破局に到るということを示す例として、Gerald と Gudrun の関係が示されている。ロレンスは「星の均衡」という理想の有効性を Ursula と Gerald の観念的理想関係だけでは具体的な証明ができないと分かっていたのかもしれない<sup>28)</sup>。そのアンチテーゼとして Gerald と Gudrun の具体的な失敗例を提示することにより証明しようとしたと言えよう。

Gerald と Gudrun の関係は官能的結合に支えられていた。彼らの関係が、その背景に譬え支配関係があったとしても、それなりに官能性が介在していた間は未だ良かった。問題は2人が袋小路のような世界、肉体的感覚を徹底的に排除した精神だけの世界の具現を表す環境に投げ入れられ、官能性さえもその関係から剥奪された時である。2人の関係がどのように変質するかが物語最後の部分で示される。Ursula と Birkin、Gudrun と Gerald の2組の男女がクリスマス休暇を海外で過ごそうとして、チロル地方の「気が狂う程に人を高揚させる沈黙と全き白色の世界に」<sup>29)</sup>にやって来る。この頃、Gerald は既に Gudrun に精神的に依存の度を高めていたが、Gudrun も何か理由のはっきりしない焦燥感に捕らわれており、それから抜け出す道を Gerald に期待していた。彼女の方も彼に依存していたと言える。Gerald が自らの虚しさから救われようと、完全に彼女に依存するようになると、彼がひどい重荷になってしまう。Gudrun がこの焦燥感から何とか逃れる道を見付けようとしている時、そこで痩せて皮膚が浅黒く、二十日ネズミのような目をし、少年のような体つきをした Loerke というドイツ人の彫刻家と出会う。彼の徹底したシニシズムは Gudrun の心の深部に Gerald の思い及ばぬ程深く浸透して行く。当然 Gerald と彼女の関係は悪化して行く。その宿での人間関係は耐え難い雰囲気が変わって行く。このような状況に失望し、Ursula と Birkin は温暖の地イタリアに向かって旅立つ。彼らが去った後、孤立無援となった Gerald は一層激しい嫉妬の念に駆られて行く。

Gudrun は Gerald の世界を捨てた。だが、それによって彼女の求める新世界が開けて来るわけではなかった。彼女にも世界は終わったも同然である。ただあるものは「内部だけの個人的な暗黒、自我の内に閉じ籠もった感覚の陶醉、生命の組織を悪魔的に墮落させる肌と肌を摺り合わせるような、運動だけ」<sup>30)</sup>という状態であった。こういう官能の満足以外、彼女には最早何も残されていなかった。Gudrun に捨てられ、平衡感覚を見失い、自己の精神の真空状態を思い知らさ

れた Gerald は彼女の喉元を捉えて殺害しようとする。だが、突如激しい自己嫌悪に襲われて Gudrun を突き放し、放心の態で雪山をあてもなく登り、やがて転落死してしまう。転落した時、Gerald は彼の魂のなかで「何か壊れる」のを意識している。「何か」とは Gerald によって代表される氷のように破壊的な白人種の精神主義であろう。官能と精神を分裂させた Gudrun と Gerald の関係は Ursula と Birkin の「星の均衡」の関係からはほど遠いものである。この様に相互依存、相互利用の関係に基づく結婚は失敗に終わった。ロレンスは失敗の典型として Gerald と Gudrun の組み合わせを、「星の均衡」に基づく組み合わせと対照的に示して、Birkin と Ursula の結び付きに確証を与えたのである。

注

- 1) D. H. Lawrence, *Women in Love*, p.581
- 2) *Ibid.*
- 3) *Ibid.*, p.103
- 4) *Ibid.*, p.105
- 5) Warren Roberts and Harry T. Moore, ed. *Phoenix II*, pp.100-101,  
Prologue to “Women in Love” に “It was a failure, a bitter, final failure. He could not take from her what he wanted, because he could not, bare-handed, destroy her. And she despised him that he could not destroy her.” とある。
- 6) Graham Hough, *The Dark Sun: A Study of D. H. Lawrence*, p.87
- 7) F. R. Leavis, *D. H. Lawrence: Novelist*, p.177  
リーヴィスは Hermione がロレンスのパロディの役を果たしていると言っている。
- 8) *Ibid.*, p.163  
*Women in Love* は the diagnosis of a civilization in which the idealism … has become a deadly enemy to life であるとの言及がある。
- 9) Lawrence, *Women in Love*, op.cit., p.146
- 10) *Ibid.*, p.148
- 11) *Ibid.*
- 12) *Ibid.*, p.201
- 13) *Ibid.*, p.254
- 14) *Ibid.*, p.165
- 15) *Ibid.*, p.111
- 16) *Ibid.*, p.14
- 17) *Ibid.*, p.113
- 18) *Ibid.*, p.139
- 19) *Ibid.*, p.170
- 20) *Ibid.*, p.171
- 21) *Ibid.*, p.178
- 22) *Ibid.*, p.322
- 23) Leavis, op. cit., p.193 リーヴィスはここで 2 人の間に将来の latent tensions and potential conflict が予告されていると言っている。
- 24) Mark Schorer, *The World We Imagine*, p.114 ショーラーは本作品を “a kind of psychical dialectic” の小説と評している。

- 25) Lawrence, *Women in Love*, op.cit., p.254
- 26) Hough, p.79 “it is clear enough that the moon is the white goddess, the primal woman image, *das ewig weibliche*, by whom he is obviously haunted.” とハフは述べている。
- 27) Lawrence, *Women in Love*, op.cit., p.319
- 28) J. Middleton Murry, *D. H. Lawrence: Son of Woman*, p. 112 マリは “Excuse” を取り上げて、ここに “invented and untrue” な感じを抱き、“a fundamental falsity, as of a forced conclusion” といったものを嗅ぎ取っている。
- 29) Lawrence, *Women in Love*, op. cit., p.399
- 30) *Ibid.*, p.452

#### 参考文献

- 1) Lawrence, D. H., *Women in Love*, Cambridge Univ. Press, 1987
- 2) Roberts, Warren and Harry T. Moore, ed. *Phoenix II*, William Heinemann, 1968
- 3) Daleski, H. M., *The Forked Flame*, Faber and Faber, 1965
- 4) Hough, Graham, *The Dark Sun: A Study of D. H. Lawrence*, Gerald Duckworth, 1956
- 5) Leavis, F. R., *D. H. Lawrence: Novelist*, Chatto and Windus, 1967
- 6) Miko, Stephen J., *Toward Women in Love*, Yale University Press, 1971
- 7) Murry, J. Middleton, *D. H. Lawrence: Son of Woman*, Jonathan Cape, 1954
- 8) Schorer, Mark, *The World We Imagine*, Farrar, Straus and Giroux, 1968
- 9) Vivas, Eliseo, *D. H. Lawrence: The Failure and the Triumph of Art*, Indiana University Press, 1964